

天井水・南海部 覚悟



## 【大清水トンネル】



師走の雪解け水が、南北に分かれる国境分水嶺直下、上越新幹線大清水トンネルの只中に、頭にヘルメット、青い作業服に、肩から提げた懐中電灯を揺らしながら、いま二人のJR保線員が線路脇の保守用通路を、のろのろ歩いています。緊急に呼び出されたらしく、片方の保線員のあごには、剃り残しの髭がそれと分かる程度に見て取れます。

「くそ！ 宿舎で風呂に入ってたんだぞ！ ひげ剃ってるところをいきなり呼び出しやがった——。」

「しょうがねえよ・・・なんせチョンガーで、暮れも押し迫って帰る場所がねえのは、俺とお前だけだからなあ。」

「——帰る場所がねえたって、正月くらい穏やかにのんびり過ごしてえじゃねえか。去年もたしか、除雪作業中に除夜の鐘、だったんだぞ。」

「そんなこと言ったってどうにもなんねえだろ・・・この時期常にスタンバイ強いられる役どころなんだから。」

ふたりのボヤキが、深夜のトンネルに何度もこだまして、凍てついた空気が一層冴えわたります。

「それで・・・何処なんだ、その滝みたいになってたって場所は？」

「報告してきた運転士の話じゃ、入り口から2, 700m辺りって云うから、もう少しだ・・・。」

僅かな上り勾配の暗い隧道の先から、かすかな水のざわめきが聴こえてきました。

歩き進むにつれて、壁に反響して揺らいでいた水音が徐々に安定します。

水滴の破裂音が明瞭になった辺りで、懐中電灯の光を天井に向けると、落下する水飛沫で一面湿润しています。

「ここかあ・・・滝ってのは少々大袈裟だなあ。」

「何か、おかしいぞ・・・。」

「心配するな、大した事は無い、このところの大雪で水量が増えてるんだ。」

「下から、上に落ちてるんじゃないか・・・？」

細い懐中電灯の光芒に、水飛沫は煌めくばかりで、それがどう動いているのか目を凝らしても判然としません。

「ちょっと、しぶきの中に手のひらを入れてみる——どうだ、どっちから圧力感じる？」

「下からだ・・・。」

「——どうなってんだ、連絡しなきゃ！」

慌てて携帯を取り出します、それを遮るように・・・。

「――やめとけて！」

「この年越しの真っ最中に、水が下から上に流れ落ちるなんて、誰が取り合うもんか。気の早い屠蘇気分の酔っ払いの報告とでも思われるのが関の山だ――。」

「それより、何処から出水している？スラブ軌道の下からか・・・。」

「――通路脇の湧水弁からだ、排水側溝を伝って流れたのが、ここに溜まってそのまま天井に流れ落ちてるようだ。」

「問題になりそうな出水クラックが近くにあるか？」

「――無さそうだ。」

天井の湿潤を暫く辿ると、格子状の構造物の廻りで、吸い込まれるように消えています。

「何だ、あれは？」

「換気用縦孔の上部排気口だ、末端は山上の排気塔に繋がっている。」

「その上は？」

「空だが・・・。」

「よし、保線区に報告だ。」

「――越後湯沢入り口より2, 700m地点に、小規模の出水が認められるものの、水量拡大の兆候なし。更にそれより上毛高原方向約200mに亘り、天井部に湿潤を確認すれど、換気用縦孔から順調に排水され、架線の水没・短絡等認められず、設備運用に支障なし。上越新幹線新潟保線区大清水トンネル、異常なし・・・以上連絡終わり。」

(保線員の本音) 水がどっちからどっちに流れようが関係ねえ、ちゃんと排水できてりゃそれでいいんだ・・・それで、新幹線に乗ったお客が安全なら、それで充分だ。

## 【湯布院温泉】



朝の日の出と先を争うように、今日も（好々爺5人組）が手拭いを下げて入ってきました。

「――いつも通り、5人分。」

いつも通り5人分の代金をまとめて、最高齢の代表が番台の上に並べます。

「温かったら云ってくれよ、直ぐに沸かすから。」

馴染みの客と交わす言葉も、いつも通り替わりはありません。皺だらけの裸体が、湯気を湛えた洗い場に次々消えていきました。

「直ぐに沸かすと言ってもなあ・・・。」

源泉かけ流しですから、実際に湯を沸かす必要はなくて、高温の源泉バルブを多めに開きさえすれば良かった筈ですが・・・以前は一晩かけて丁度適温に冷ましていたのが、最近は冷め過ぎるようで、朝からバルブは開きっぱなしの状態です。

どうも源泉の温度が下がっているようだ・・・湯量が減少しているのかもしれない・・・くだくだ悩んでいる間に、浴場のガラス戸が開いて声がかかりました。

「――ちょっと来てくんねえか。」

湯舟の中の好々爺の顔がみんな上を向いています。

「こりゃ、何の趣向だい？」と言って、最高齢が天井を指差します。

湯気に霞んで判然としませんが、ドーム状の天井がどうやら水を大量に湛えているようで・・・逆さの水面が冬の朝日を反射して、ゆらゆら煌めいています。

「――上下を湯に挟まれて湯舟に浸かってるってのは、余り気味のいいもんじゃねえな。」

と言いながら、顔はにやけています。

隣の女湯からは、5人組より更に早出の（還暦遙か3人娘）の拍手と歓声が聴こえます。

歳を重ね、万事了解し、視界の地平線にあの世の水際を明瞭に見据え始めたつわもの達の、ものに動ぜぬりアクションでしょうか。

「ここの屋根はな、30年前に俺が葺いたんだが・・・。」

街の最古参の大工が、自慢げに話し始めました。

「空から降る雨は一滴たりとも漏らしゃしねえが、天井に溜まった湯にゃ自信がねえな・・・急いでブルーシート張ったがいいんじゃないかねえか？」

「何処に張るんだ？天井の下か、屋根の上か？」

最高齢が茶化します。

「――天井の湯に訊いてみな。」

穏やかな笑いが浴場を包んで、平和な朝の時間がゆったり流れます。

(銭湯の主人の本音) 床に溜まろうが、天井に溜まろうが、そりゃ湯の勝手かも知れねえが、出来りゃ湯舟に溜まって貰いてえもんだ・・・歳とったお客に、逆立ちして湯に入ってくんねえなんて、とても言えねえからよ！

## 【平山観音】



「――これか、重力異常の池っていうのは。」  
離合に気を使う細い砂利道を、砂埃を上げながら一台の黄色いガブリオレが、駐車場に入ってきます。  
ドアを開けて、袈裟を懸けた僧侶が三人、白い息を吐きながら降りてきました。  
一人は細い顎につり上がった狐の目、もう一人は濃い髭に銀色のレイバンサングラス、最後は着込んだ衣もはち切れんば

かりの脂肪の塊・・・。

三人とも僧家の長男、同じ境遇の坊主3人組です。

「こんな処に、寺があるとは思わなかったろ、都会のミステリースポットだ。」

運転席から降りてきた狐目の坊主が、みんなを本堂へと案内します。

頭上を跨ぐ高速道路の二重橋から、絶えず車の走行音が聴こえます。

「どういう縁なんだ、この寺と？」

髭レイバンの坊主が尋ねます。

「先代が、うちの住職と高野山大学の同期なんだ――。」

「親父が相談受けて、そういうのは俺が得意だからって、白羽の矢が立った。」

「どういう相談なんだ？」

「この池は、昔から不思議な言い伝えがあって・・・天に向かって水柱が龍のように立ち上ったとか、風も無いのに水面に大波が現れるとか・・・何でもその昔、壇ノ浦から敗走した平家の残党が、この池で喉の渇きを潤した後、一同揃って空に吸い込まれるように飛び上がっていくのを、地元の百姓が目撃したんだそうだ。」

三人とも本堂の広縁に腰を下ろし、神妙に水面を見つめています。

「殆どは、根拠の無い迷信だが・・・ただひとつ、池の中心に向けて水面が盛り上がってるって云うのは、どうやら近所の住民に信じられているようだ。」

「――どういう事？」

「――つまり、池の真ん中と岸辺の水位が違うってことだ。普通には分らんが、毎日見てるとはっきり盛り上がって見えるらしい。」

「それが、重力異常か？」

「明治の終わりに、機械を使って測定したんだが、中心部の水位が平均して約5cm高かった・・・。学者は誤差の範囲だと取り合わなかったが、地元じゃ話題になった。――その時の調査で分かったんだが、池の中心部は水深がかなりあって、水質も2層に分かれている、どうやら深いところに湧水源があるらしいんだ。」

「――昨年先代が亡くなって、いまの住職が後を継いだんだが、何とかその5cmの差を誰にでもはっきり見えるように出来ないかって相談だ――。」

「観るところ対岸まで50mはあるぞ、50mの中の5cmをどう見せる？」

「南側の岸が広く開いているだろ、この部分を岸に沿って長さ8m深さ2mほど掘削する。水面との間にアクリルガラスの壁を立てて、水中が覗けるようにする。ちょうどイルカの曲芸プールの透明の壁と同じ趣向だ。池の水も透明度があるし、錦鯉も泳いでいて、岸から階段を下りてきた参拝客が充分愉しめる——しかし目的は、水面のラインから池の中心部を見透かすことだ、何とか5cmの盛り上がりを体感してもらえと思う……。」



既にその場所には、仮設のフェンスで囲われた中に、建設用重機と資材が搬入されていました。

「段取りは完璧だ、明日から止水用シートパイルの打ち込みに掛かる。」

「まったくお前は、坊主にしとくにゃ勿体無い……。」  
脂肪太りの坊主が、いつも手提げに携帯している小饅頭を、口いっぱい法張りながら呟きました。

(住職の本音) いえね、一昨年寺を継いだときは信用してなかったんですよ、親父や近所の住人からいくら言われても、水面が盛り上がるなんて理屈に合わない……重力異常なんて気のせいだって思っていたんです。

それが、去年上越新幹線のトンネルの事件や、由布院の銭湯の報道を視てね、天井水って云うんですか、これかも知れんな、と思うようになったんです。

そこで、ポンプを使って池の真ん中の深いところの水を、ポリタンク一杯分汲み上げました。

最初はそんなこと思ってもいなかったんですが、急にその水が飲みたくなりまして、寝る前にポットで沸かしてコーヒーにして飲んでみたんです。——朝トイレで、自分の小便がそのまま上に上がって顔を濡らしたときは、何だか嬉しくなってトイレの中で大笑いしましたよ。

天井水が、私の体内で濃縮されたんだと思います。

今度の工事で、少しでも参拝客が増えてくれればいいなあと思っています。

料金なんて取りませんよ、池を見に来た人が、ついでに観音様に手を合わせてもらえれば、それで充分です……。

## 天井水

<http://p.booklog.jp/book/78097>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/78097>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78097>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ